

ルソーの応用政治学（二）

——『コルシカ憲法草案』の場合——

川 合 清 隆

1 はじめに

前稿で解説したように、ルソーの『コルシカ憲法草案』（以後、『憲法草案』と略記）はフランス国王軍（王立イタリア部隊）に勤務するコルシカ人マチュー・ビュッタフォコ大尉の呼びかけを契機に執筆された。1762年に公刊した『社会契約論』（以後、『社契論』と略記）で、ジェノヴァ共和国の支配下にあるコルシカで独立闘争を戦う勇敢なコルシカ人民に対し、ルソーは数行の讃辞を書き込み、同時に、ジェノヴァの無法な専制支配に起因するヴァンデッタの悪習で知られる中世的な原生社会のままのコルシカを、ヨーロッパに残された「なお立法が可能な唯一の国」と呼んだ。この『社契論』におけるルソーのコルシカ讃は、コルシカ政府の指導者たちの耳に入った。

ルソーが讃えた、勇敢なコルシカ人の独立闘争はコルシカ史では《四十年戦争》の名で呼ばれる。前稿で記述したように、この独立闘争は、1729年の農民蜂起に始まり、1755年には、島の中央の山塊地にある要塞都市コルテに、パスカル・パオリを首班とする一応の憲法を持った独立政府を成立させるのに成功した。しかし、ヨーロッパ列強が承認する完全な主権国家が出現したわけではなく、ジェノヴァはなお沿岸諸都市を支配し続けた。人口僅か12万の小国コルシカは列強の策謀に翻弄され、結局、1768年5月15日のヴェルサイユ条約によってフランスに併合された。

この条約で、ジェノヴァ共和国は、向こう10年間、年20万リーブルの資金援助を受ける条件でコルシカの宗主権をフランスに譲り渡したのである。ジェノヴァは、それ以前の軍事援助による負債、および今回の条約に伴う負債を返却すれば、宗主権を買い戻すことができるという条件付の条約であったが、ジェノヴァにもはやその能力がないことは明白であった。ジェノヴァは実質上、コルシカをフランス王国に売却したのである。

この条約締結を知ったパオリは、一週間後の5月22

日、コルシカ評議会を開き、開戦を決定した。その後のフランス軍に対するパオリ政府軍の戦い、ポンテ＝ヌオーヴォにおける最終的敗北は全ヨーロッパに伝わった。パオリは、1769年6月13日、コルシカを離れイギリスへ亡命、独立闘争は終結、コルシカ共和国の夢は潰えた。

したがって、ルソーが『社契論』を公表した時、コルシカはヨーロッパ国際政治の一つの焦点であった。しかも、アメリカ合衆国の独立革命、そしてフランス革命を迎える十八世紀後半期は、まさに啓蒙思想が現実の歴史に結びつく近代への転換期にあり、コルシカは啓蒙の知識人の注目の的であった。とりわけ、パスカル・パオリは、ジェノヴァに対するコルシカの反乱指導者の一人であった父親ジャチント・パオリに連れられ、14歳でナポリに亡命し、ナポリ大学で啓蒙思想の洗礼を受けてコルシカ島に帰還し、独立政府の首班となった。殆ど独裁的な権限を委ねられた《将軍》の地位についたパオリは、分裂と抗争を繰り返すコルシカ人の《国民》的統合の実現に専念し、国民主権の共和国の実現に向け近代的改革を実行した。ルソーが『社契論』を公表したとき、コルシカ独立闘争を指揮する啓蒙主義の軍人政治家パスカル・パオリは啓蒙の思想界が注目する時の人であり、コルシカに共和国が誕生する可能性があった。ルソーはパオリを《偉人》と呼び、常に尊敬の念でその名を記している。

ビュッタフォコの憲法起草の申し出に対するルソーの返書は、感激と興奮を示してあまりある。「この計画だけで私の魂は高揚し、私を夢中にさせます。私の余生はとても高貴に、とても有益に、とても幸せに費やされるでしょう。[……]この点ではどうか私を信頼してください。私の命と心はあなた方のものです」、とルソーは書いた（L. 3523³⁾、1764年9月22日付、前稿で訳出）。

ルソーがビュッタフォコと最初の往復書簡が交わしとき、ルソーは人生の窮地に追い込まれていた。『エミール』と『社契論』の出版後、逮捕状を出され、フ

ランス王国を脱出し、亡命生活に入っていた。彼は祖国ジュネーヴ共和国への帰還を願ったが、ジュネーヴ政府もまた彼に逮捕状を出した。ジュネーヴへの帰還はならず、結局プロシャ領ヌシャテルの寒村モティエに、どうにか避難所を見つけることができた。啓蒙君主としてヨーロッパにその名が知られるプロシャのフリードリヒ二世と、ルソーの愛読者であったヌシャテル総督ジョージ・キース卿がルソーの身の安全を保障し、庇護下においたのである。

しかし、ルソーの身边では問題が絶えず、静かに余生を過ごせる隠棲所を探していたから、ルソーにとってビュッタフォコの申し出は天の配剤のごとく感じられたであろう。ジュネーヴ政府は人民主権を説く『社契論』をすべての政府の転覆を企図し、人民に反乱をそそのかす危険な書物として告発した。ところが、パオリの新生コルシカがルソー理論を受け入れるかもしれないという希望が芽生えたのである。

ビュッタフォコの手紙を受け取ったとき、ルソーは即座にコルシカへの移住を考えた。自分の理論をコルシカ人民に適用し、かつコルシカ人民に適應した憲法草案を書くためには、何をおいてもコルシカを知らなければならない。それには現地で「半年も過ごせば、百巻の書物を読むより多くのことを学べる」(L. 3523, 前稿で訳出)のである。そこで、偉人パオリに保護され、静かな隠棲生活をしながら、コルシカ統治の憲法構想の仕事に取り組むのであれば、それは至福の余生であったろう。ところが、ルソーはコルシカへ行かなかった。デヴィッド・ヒュームの招きでイギリスへ渡った。

ルソーの死後、1861年にはじめて日の目を見た、今日われわれが読むことのできる『憲法草案』はコルシカ人の手には渡らなかった。複雑な曲折を経たルソーの執筆経過は、霧に包まれた部分が多い。本稿に資料として掲げるルソーとビュッタフォコとの往復書簡、1764年8月に始まり65年10月までの約1年間に交わされた10通の往復書簡(最初の往復書簡2通は前稿)は、その曲折をリアルに語る『憲法草案』成立過程の基礎資料である。

ところが、ルソーにコルシカの《立法者》となってほしいと申し入れてきたビュッタフォコは、コルシカ政界の立役者の一人であったが、その政治的立場はパオリの独立派とは異なり、完全なフランス併合派であることが今日の研究で判明している。したがって、ビュッタフォコの申し出は、単にコルシカ独立の純粋な愛国心からのものではない。彼はルソーに対しても

背信的な政治的意図を隠し持っていたのであるが、そのことはビュッタフォコの書面から読み取ることはできない。本稿の目的である資料訳出の前に、まずこの点を解説しておかなければならない。

2 ビュッタフォコの経歴と意図

現代コルシカの歴史家ポール・シルヴァニは、マチュー・ビュッタフォコ(イタリア語読みではマテオ・ブッタフォコ)の履歴を次のように書いている。



マチュー・ビュッタフォコ (1731-1806)
(シルヴァニ著『パオリ時代のコルシカ』より)

マテオ・ブッタフォコは1731年生まれ。父はアントニオ、母はコンテッサ・コロナ＝チェッカルデイ。父のアントニオは、1738年フランス軍の第一回コルシカ介入時に、指揮官ボワスイューの捕虜となった後、1749年フランス王に使える王立コルシカ部隊の将校となった。その後、数度にわたりヨーロッパ戦役で活躍し、1746年聖ルイ騎士団の一員となり、1749年コルシカに戻った。

息子のマテオは、生来の軍人である。1739年、8歳にしてすでに父の部隊で志願兵として働き、2年後にはフランス王立イタリア部隊の旗手となった。父について従軍し、1746年大尉に昇進、その階級章が自慢であった。大陸に渡り、オーストリア継承戦争、七年戦争を戦った。1758年、ミノルカ島のマオン要塞の攻略で名を挙げ、ブッタフォコ大尉は1762年まで当地に留まり、そこで彼は父同様、聖ルイ騎士に任ぜられた。

[ルソーが『社契論』を公表した1762年]、彼は若干31歳で戦場を駆け巡ってきたのであるが、パオリが国民の組織化に専念しているコルシカの状況をも注目していた。彼は、ショワズールに『コルシカ覚

書』を送り、そこでイギリスの野望を告発した。「島にフランスの部隊を送りこむこと、また、島の現政府を安定させることは、フランスの国益に合致します。」コルシカ人の望みはひとえにジェノヴァ軍の完全追放であった。そして彼は強調していた。「フランス王への私の忠誠心と祖国に対する私の忠誠心は決して相容れないものではありません。」マテオ・ブッタフォコは賽を投げたのだ。彼にとって、コルシカはフランス王国の一部となる以外に救われる道はない。さもないければ、コルシカが他の外国勢力の支配下に入ることは不可避だからである²⁾。

コルシカ内部では、ジェノヴァ、フランス、オーストリア、イギリスなど、ヨーロッパ列強と結びついたさまざまな勢力があるなかで、ブッタフォコは確信したフランス派であり、ヴェルサイユ宮廷、とりわけ時の外務大臣ショワズールと結びついていた。したがって、独立を目指すパオリとも、腹の中では考えを異にしていた。ルソーは、ブッタフォコがフランス軍大尉である事実について、最初の返書で次のように言及している。

あなたの島が置かれているなお不安定な状態についていろいろ考えねばなりません。それでも、コルシカ人の今の指導者のもとであれば、コルシカの人々はジェノヴァを恐れる必要はありません。フランスが軍を派遣するという噂についても何の心配も要らないことが判ります。どうしてそう思うかといえば、貴殿ほどの愛国者——私にはそう思えるのです——が、フランスが軍を派遣するというにも関わらず、当のフランスで軍務についておられるからです。しかし、列強がいずれも貴殿の国の独立を認めない限り、独立が保障されることは不可能です。(L. 3523, 前稿で訳出)

ルソーのこの文章のあいまいさを解釈すれば、次のような意味であろう。たとえフランスが軍を派遣し、コルシカの独立が脅かされるような事態が起こっても、ブッタフォコが尽力し、そのような事態を防ぐだろう。私はあなたがそのような「愛国者」であると思う。ルソーはブッタフォコにそういつている。ところが、ブッタフォコの意味も行動もルソーの推測する《愛国者》のあり様とは異なっていた。シュワズールは、コルシカをジェノヴァから奪い、フランスに併合するという方針を決めていた。彼はそのためにブッタフ

ォコを巧みに利用したし、ビュッタフォコにとってはフランスへの併合がコルシカの生きる道であった。

パオリが將軍の地位に着いた翌年の1756年、コルシカ人の反乱に手を焼いたジェノヴァは、ヴェルサイユに援助を求め、第一次コンピエーニュ条約を結んだ。フランスはジェノヴァを財政的に援助すると共に、アジャクシオ、カルヴィ、サン＝フロランの沿岸3都市に軍を派遣した。バステリアとボニファツィオはジェノヴァの手に残った。フランスの部隊は同年の七年戦争開始に伴い退去した。ルイ十五世は、1764年8月6日、さらに第二次コンピエーニュ条約を締結した。ビュッタフォコが初めてルソーに手紙を書いたのは、1764年8月31日であるから、第二次コンピエーニュ条約の締結後である。ジェノヴァの宗主権保護という名目で、フランスはマルブーフ伯爵を指揮官とする6個大隊をコルシカに上陸させたのは、同年12月である。フランス部隊は、今回はコルシカ海岸沿いの5つの要塞都市、アジャクシオ、カルヴィ、アルガジョラ、サン＝フロラン、バステリアを占拠した。したがって、ルソーが1764年9月22日付の第1返書で言及している「フランスが軍を派遣するという噂」は事実となったのである。

このとき、パオリの軍は戦わず、フランス軍は平和裡に上陸を実現した。司令官マルブーフの任務は、交渉によってコルシカの平和を実現することであった。パオリはシュワズールと直接書簡を交わし、また、ヴェルサイユに使節を派遣し、コルシカの独立を承認するように交渉していた。パオリのその使節がビュッタフォコであった。ビュッタフォコはこの点をまったくルソーに説明していない。彼は、ルソーへの2通目の手紙で、「数日来、私はパリにきています」(① L. 3542, 1764年10月3日付³⁾)と書いているが、このパリ滞在はヴェルサイユとの折衝であろう。しかし、シュワズールの方針もビュッタフォコの意向も、コルシカ独立政府の承認ではなく、コルシカからジェノヴァの影響力を排除し、いかにしてフランス主権を確立するかであった。ところが、われわれ読者には、ビュッタフォコの文面は独立を志向する愛国者の真摯な情熱から書かれているように見え、文面から彼の秘された背信的意図を推察するのは不可能である。

ビュッタフォコは10月3日付のルソーへの同じ返書で、ルソーが申し出を受け、さらにコルシカ移住をさええ考えるという回答に感激し、「私はまもなくコルシカへ渡りますので、この喜ばしい便りをパオリ氏に届けます」と書き、フランス軍の派遣問題、さらにパオ

リの政府がヨーロッパ列強との関係でどのような状況にあるかを次のように説明している。

私たちの島に来るはずのフランス軍部隊は戦争が目的のように見えません。この点で、きっとあなたも私の評価を正しいと判断されると思います。そして今のところ、この判断が否定されることはないでしょう。フランス軍はせいぜい、[ジェノヴァとの] 和平交渉のためにフランス王の仲介役を務めるだろうと、私は推測しています。ただし、ジェノヴァは仲介を受け入れないでしょう。それで、もし部隊が完全な中立を守るなら、コルシカ人はジェノヴァ人が掌握している唯一の町ボニファツィオを攻略するためにだけ共和国と戦うことになるでしょう。それゆえ、すべての視線が国内の最善の体制の可能性に向けられるでしょう。統治形態が中心的課題になるでしょう。このような想定で、あなたにコルシカ旅行をお勧めしているのです。

私たちの国の独立は、まだすべての列強によって承認されてはいません。しかし、ルソー殿、かなりの国々が認め始めています。ローマ法王は使節を送ることによって、手本を示しました。ジェノヴァ人の反対にもかかわらず、使節はコルシカ人の要請に応じて派遣されてきました。使節はコルシカの国民政府宛に派遣されました。彼はその権限が認証された後、職務を遂行しました。トスカーナは全体がわれわれの味方です。この国民の船舶はわれわれの所に接岸し、小商いを行っています。彼らは軍需品を含め、われわれが必要とするあらゆるものを運んできますが、ジェノヴァ人は彼らの荷物検査はしません。コルシカの国旗はリヴォルノでは、受け入れられ、尊重され、保護されています。摂政はわれわれを国家として処遇し、[オーストリア] 皇帝の指示に基づいて行動しています。ナポリ王とサルディニア王は彼らの臣民にわれわれとの通商を許可しています。サルディニア王はさらに、国土の周辺海域においてわれわれの船舶を尊重するとしています。サルディニアの沿岸で拿捕された船をわれわれに返還させました。その船は[ジェノヴァ] 共和国の費用でわれわれの港まで運ばれ、共和国が損害の賠償を行いました。つまり、イタリアの諸国はわれわれを自由な国民とみなし、われわれの運命に関心を寄せています。

この文章から、当時のパオリの政府が周辺諸国とど

のような関係にあったかがわかる。しかし、コルシカはフランスに合併するのが望ましいとするビュッタフォコ自身の考えはどこにもない。64年12月フランス部隊が5都市を占拠した後、翌65年2月26日付の手紙で、ビュッタフォコは再びこの問題でルソーに次のように書いている。

フランス軍部隊が到着して以来、パオリ氏は絶えず視察をしていました。彼は山向こうからちょうど戻ってきたところです。ジェノヴァ共和国の密使たちが妨害を仕掛けたのですが、彼が出かけたので北部は秩序が回復しました。密使たちはフランス軍が来て事がやりやすくなったとうぬぼれていました。ところが、フランス軍の司令官は、国王の意図はコルシカ国民のなかに騒動を巻き起こすことではなく、反対に国民の秩序と全体的団結を維持することであると声明しましたので、反乱者たちは空想的な計画を断念しました⁴⁾。

ビュッタフォコはシュワズールとの関係にまったく言及していない。ところが、シュワズールがビュッタフォコに与えた使命は歴史資料で確認されている。シルバーニは、次のように書いている。

ルイ十五世はジェノヴァと2回目のコンピエーニュ条約に調印した。ジェノヴァはフランスに向こう4年間、5つの要塞都市を占拠することを承認した。10月9日、マルブーフがコルシカに上陸した。条約調印の3ヵ月後、ヴェルサイユはこれらの政策をビュッタフォコに伝達し、コルシカで6ヶ月の任務を彼に委ねた。ヴェルサイユはビュッタフォコに明確に告げていた。「彼[ビュッタフォコ]が国王の意図をすべて適切に遂行するために何事も怠らないならば、あらゆる点で有益かつ心地良い展望」が彼に開けるであろう、と。

ヴェルサイユは並行して、マルブーフにビュッタフォコ宛の手紙のコピーを送った。閣議は王立イタリア部隊を2つに分け、王立コルシカ部隊を立ち上げるという計画に、マルブーフを参画させたのである。「私[シュワズール]はビュッタフォコにも計画を知らせました。あなたは彼の一族と将軍パオリへの彼の影響力を知っているでしょう。この将校がコルシカとジェノヴァ人たちの現状について語ってくれたことに私は満足しています。そして、私に熱心に仕えるように仕向けるために、私は王立コルシ

カ部隊の設立の任務を負わせるのが適切であると判断しました。[……] 私は、コルシカ滞在期間中の彼の政治的ならびに軍事的行動に王が満足された場合には、彼は部隊長に昇任すると言う保障を与えました。」結局、ビュッタフォコはコルシカで、シュワズールが期待した通りに振舞った。彼は、1765年11月27日、それより2週間前に再編された王立コルシカ部隊の指揮官の地位に着いたからである⁵⁾。

ビュッタフォコのルソーへの最初の手紙の肩書きは、「王立イタリア連隊幕僚長補佐官」であるが、やがてイタリア連隊は2分され、ビュッタフォコはコルシカ連隊司令官に昇進するのである。ビュッタフォコは、フランス併合を画策するヴェルサイユ宮廷に同調した完全なフランス派であった。ルソーが書き残した『コルシカ憲法草案』は、独立共和国構想であり、もしビュッタフォコの裏の顔を知っていたら、ビュッタフォコの申し出に応ずることはなかったであろう。

また、ヴェルサイユとの交渉でパオリの使節を務めながら、ビュッタフォコはパオリをも裏切っていたことになる。パオリは権利の平等を基本法とする《国民国家》の樹立のために戦っていた。ところが、ビュッタフォコは「貴族的偏見のしみこんだ人物であり、貴族の特権の復活を望んでいた。[……] そのため、パオリの憲法草案に関する覚書を起草し、そこに貴族階級についての彼自身の考えを盛り込んだ。パオリはこのビュッタフォコの覚書を評議会に諮ったが、評議会はビュッタフォコの覚書を受け入れなかった。」⁶⁾

ビュッタフォコはその覚書をルソーにも送った。ルソーは目を通して次のように書いている。「私はあなたが送ってくださった覚書に少し目を通しましたが、私の考えはあなたの国民の考えとはなほだしく異なることに気づきました。私が提案するプランに不満を抱く人がたくさんいるだろうということ、そして恐らくあなた自身が第一にそうなるかもしれません。」⁷⁾ したがって、ルソーのほうも、ビュッタフォコの書簡の内容を丸呑みし、ビュッタフォコという人物に全信的頼を置いていたわけではない。

コンピエーニュ条約によって、フランス部隊がコルシカに上陸した後、将軍パオリはフランスに対し開戦し、敗北し、イギリスに亡命した。

時代は下って、フランス革命の時代、「1776年にルイ十六世から伯爵位を授けられていたビュッタフォコは、1789年の全国三部会のコルシカ貴族代表となるが、その後、亡命派に身を投ずる」⁸⁾。他方、パオリは、憲

法制定国民議会によってイギリスから呼び戻され、ジェノヴァの専制支配と戦った国民的《英雄》として満場の歓呼で迎えられた。1790年7月17日コルシカに帰島すると、パオリは9月9日、オレッツァの評議会で議長に選出され、コルシカ国民衛兵軍司令官となった。しかし、国民公会の時代に入り、ジャコバン独裁が始まると、ビュッタフォコの派閥勢力の策動もあり、パオリは「フランス共和国の裏切り者」となった⁹⁾。パオリは再びイギリスに亡命、1807年2月5日、ロンドンで生涯を閉じた。

では、ビュッタフォコがルソーにコルシカ憲法起草の申し入れをした真意は何であったのか。この問題を論じるほとんどの研究者が言及するのは、アーネステイン・デデック＝ヘリーの古い研究の結論である¹⁰⁾。コルシカ貴族の出身であり、その階級的偏見を棄てきれないビュッタフォコは、パオリに対抗して、ジェノヴァの支配下で崩壊した貴族階級の復活を含む独自の憲法構想を提出したが、コルシカの評議会はパオリの国民国家構想を採用し、ビュッタフォコの構想を退けた。ヴェルサイユ宮廷、とりわけショワズールと結びついたビュッタフォコは、ルソーから新憲法構想を引き出し、それを利用してパオリの路線を妨害する《賭け》に出たという解釈である。ビュッタフォコは、自分の『覚書』を土台にして、ルソーが憲法案を書けば、パオリの構想を妨げるのに役立つのではないかと考えて行動したという解釈である。ビュッタフォコの『覚書』に関してルソーは次のような感想も書き送っている。「あなたが送ってくださった書類の中に、1764年にヴェスコヴァドで出された覚書が含まれています。あなたの手になるものだろうと推測するのですが、優れたものだと思います。」¹¹⁾ この感想は、先に見た「私の考えはあなたの国民の考え」とはなほだしく異なり、私の提案に不満を抱く人がたくさんいるだろうと思うが、「恐らくあなた自身が第一にそうなるかもしれません」という言葉と矛盾する。

この問題についての最新の論考と考えられる、ジャン＝リュック・ギシェの結論も、基本的にデデック＝ヘリーの解釈を追認している。ビュッタフォコは、ポーカーの賭けのように、「試しに」やってみたというのである¹²⁾。現在の研究ではこれ以上の結論は提出されていない。なぜなら、決定的な資料が欠けているからである。ルソーとパオリとの書簡が一通も発見されていない。以下の資料に訳出したものには、ルソーからパオリ宛の手紙（⑦ L. 4305）が一通含まれているが、名宛人の記述はなく、編者がパオリ宛と推定した

ものであり、しかも内容は殆ど無意味である。

しかし、ビュッタフォコの裏の意図が以上のようなものであったとしても、また、ルソーの対応に紆余曲折があり論理的にも一貫性を欠き、ルソーの真意自体も不透明であるとしても、ルソーとビュッタフォコの往復書簡が、『コルシカ憲法草案』執筆経過をリアルに物語る第一級の資料であることに変わりはない。しかも、ビュッタフォコという人物が貴族的の偏見を脱却できずに啓蒙の時代を生きた軍人貴族であることを了承して読めば、まさに《コルシカ共和国》の運命がかかった時期に交わされたルソーとビュッタフォコの対話は興味津々である。以下に両者の往復書簡を訳出する。

3 資料：ルソーとビュッタフォコの往復書簡

① L. 3542：ビュッタフォコ大尉からルソーへ

パリ，1764年10月3日

ルソー殿、あなたのお手紙を受け取ってわたしが感じた喜びがどれほどであったかを告げる必要はないでしょう。熱と炎、そして情熱をもって人類の大義に身を投じることは、まさにあなた、あなたの徳義、あなたの魂の寛大さにふさわしいことです。コルシカ人は、もし善意の手によって賢明な制度を定められ、幸福へ導かれなければ、その成功にもかかわらず、嘆き続けることになるでしょう。やがて訪れる繁栄に、私は今から喜びを感じています。私はまもなくコルシカへ渡りますので、この喜ばしい便りをパオリ氏に届けます。

ルソー殿、あなたの熱意がわかりましたので、私は他のことにも不安は感じません。すべての点であなたには満足していただけるでしょう。あなたご自身が当地にこられて郷土と国民に関わる知識を得られようとされていることを私は喜びたいと思います。もしこの希望がかなわないなら、私たちはあなたが望んでおられる不明な点の説明や資料の提供に最善を尽くします。どうかこの仕事で私たちをお導きください。そして、私たちの文通がどのような目標へ向かって進むべきかをお教えください。しかし、まずもって私とこの文通に携わるほかの人たちへのご寛容をお願いする次第です。私は自分の能力不足を打ち明けなければなりません。私が提供できるのは私の誠意、ただそれだけです。

ルソー殿、私が一番心配しておりますのはあなたの健康状態です。私たちの幸福はあなたの健康状態に左右されます。わが祖国の繁栄を願いながら、同時に私

たちはあなたのご健康をも心から願わずにはられません。この願いを神の御心に委ねます。神はコルシカ人が専制のくびきを振り払うことを望まれました。コルシカ人のひどい貧しさ、相互の不仲、資力の乏しさにもかかわらず、高慢で残酷、そして富める共和国[ジェノヴァ]の傲慢な鼻柱をくじくことを、神は望まれました。この同じ神は、万人の幸福のために身を捧げる人の健康を気遣われるでしょう。神と、そして真理と正義を愛するすべての人にとって、その人の存在はととても大切に違いありません。高貴で神聖な仕事のなかであなたの悲嘆や病苦が軽減されること、そしてただひたすら徳義に捧げられた人生への報償をあなたがそこで見出されることを、神はお望みになるでしょう。

ルソー殿、あなたがコルシカ島へ旅をなされれば、仕事上の諸困難が取り除かれます。短期間の滞在でも、私たちからの報告では分かりにくいどんな知識でも手に入るでしょう。コルシカへの旅程は、それほど長くも難しくもなく、あなたの健康にも危険ということはないでしょう。恐れるような障害は何もありません。リヴォルノへ行けば、その後は船でコルシカへ24時間、時にはもっと短時間で到着できます。穏やかな天候を選び、快速艇に乗ればよいでしょう。われわれの港に頻繁に接岸するのは[オーストリア]皇帝旗を掲げた船です。ジェノヴァ人は皇帝旗に敬意を払います。島はととても空気の良いところです。あなたが来られれば、島民がどれほどの熱気と喜びであなたを迎えるかは改めて申しません。あなたはわれわれの藁葺き屋根の下に、素朴で質素な生活、とりわけフィレモンの善良な心を見出されるでしょう。打ち続いた[ジェノヴァによる]専制支配がもたらした荒廃をご自分の目で確かめられるでしょう。われわれがどんなひどい状態に追い込まれたかをご覧になるでしょう。

ルソー殿、できるだけ早期に憲法を定めることがどれほど大切であるかはあなたに申すまでもありません。しかしながら、あなたの熱意に頼り、あなたのお仕事を待つほうが適切であります。あなたご自身が満足できる形で始められるのは当然です。この準備ができた後には、コルシカ国民とその指導者たちの支持のみならず、さらには全ヨーロッパの支持があなたに集まるものと私は確信しています。しかし、ルソー殿、急ぎすぎることもなく、また同時に社会の改善を遅らせて消耗させることもなく、暫定的統治形態の諸原則を準備し、あとからその原則に基づいて新しい体系を確立していくということは不可能なのでしょうか。

ルソー殿、私たちがあなたに貴重な時間を割いていただくことをお頼みするのは、私たちの自由が攻撃的にならない場合だけです。われわれが戦わなければならない相手がジェノヴァ人だけであれば、自由は定着するに違いないと思います。私たちは彼らに打ち勝つ自信があります。私たちの貧窮のせいで、フランス人が彼らを援護しないとしても、海岸地域から彼らを追い出すには時間がかかるでしょう。しかし、時間はかかりますが、私たちは目的にたどり着くでしょう。黄金はいつか底を尽きますが、貧窮、恒常性、勇猛は尽きることがないとは、モンテスキュー氏の名言です。

私たちの島に来るはずのフランス軍部隊は戦争が目的のようには見えません。この点ではきっと、私の評価をあなたも正しいと判断されると思います。そして今のところ、この判断が否認されることはないでしょう。フランス軍はせいぜい、和平交渉のためにフランス王の仲介役を務めるのだろうと、私は推測しています。ただし、ジェノヴァはきっと仲介を受け入れないでしょう。それで、もし部隊が完全な中立を守るなら、コルシカ人はジェノヴァ人が掌握している唯一の町ポニファツィオを攻略するためにだけ共和国と戦うことになるでしょう。それゆえ、すべての視線が国内の最善の体制の可能性に向けられるでしょう。統治形態が中心的課題になるでしょう。このような想定で、あなたにコルシカ旅行をお勧めしているのです。

私たちの国の独立は、まだすべての列強によって承認されてはいません。しかし、ルソー殿、かなりの国々が認め始めています。ローマ法王は使節を送ることによって、手本を示しました。ジェノヴァ人の反対にもかかわらず、使節はコルシカ人の要請に応じて派遣されてきました。使節はコルシカの国民政府宛に派遣されました。彼はその権限が認証された後、職務を遂行しました。トスカーナは全体がわれわれの見方です。この国民の船舶はわれわれの所に接岸し、小商いを行っています。彼らは軍需品を含め、われわれが必要とするあらゆるものを運んできますが、ジェノヴァ人は彼らの荷物検査はしません。コルシカの国旗はリヴォルノでは、受け入れられ、尊重され、保護されています。摂政はわれわれを国家として処遇し、皇帝の指示に基づいて行動しています。ナポリ王とサルディニア王は彼らの臣民にわれわれとの通商を許可しています。サルディニア王はさらに、国土の周辺海域においてわれわれの船舶を尊重するとしています。サルディニアの沿岸で拿捕された一艘の船をわれわれに返還させました。その船は共和国の費用でわれわれの港まで運ば

れ、共和国が損害の賠償を行いました。つまり、イタリアの諸国はわれわれを自由な国民とみなし、われわれの運命に関心を寄せています。

ルソー殿、立法の完結した集成であれば、私たちにとってはこの上ない幸せです。どのような仕事が適切と判断するかはあなたにお任せします。節度を忘れ、あなたの善意に過大な要求をしたくありません。確かに民法集はあり、それがコルシカの法規です。けれども、私はその民法集のうえに政治システムを作るよりも、それを鑄直し政治システムに適応したものにしようがはるかによいと考えています。いずれにしても、あなたが計画される仕事は何であれ、その仕事の目的が賞賛すべきものであり、かつ神聖であると同じくらい、私たちは心からの感謝を抱かずにはいません。

数日来、私はパリにきています。やがてプロヴァンスに行き、そこからコルシカに渡ります。もしあなたのご返事をいただけるなら、私はエクスへ立ち寄る際に受け取れると思います。エクスには今月の20日から25日にかけて逗留することになるでしょう。お望みであれば、民法集とコルシカに関するその他の書物をお送りすることができます。現在の独立戦争の正当性を説いた書物が2冊あります。巨匠の手になるものではありませんが、国民の大義と苦しみは詳細に論じられています。ただ、論証の形式が一貫していないのが欠点です。しかし、コルシカ人に対しては何より寛大な心で応じてください。彼らが無知であるとしても、それは決して彼らの責任ではありません。他には、十六世紀までのわが国の歴史についての本もあります。そのほかにもかなりの数の著作がありますが、価値のあるものだけに絞れば、たいした量にはなりません。これらの資料をお届けするにはどんな方法があるかをお知らせいただければ幸いです。私のほうは、コルシカ、あるいはプロヴァンス、さらには連隊が駐留しているメズィエールから発送することができます。

できる限りの尊敬と感謝の念を込めて。 敬具

ビュッタフォコ

ジュネーヴ市民ルソー殿

ポンタルリエ経由、モティエ＝トゥラヴェール宛

② L. 3573：ルソーからビュッタフォコ大尉へ

モティエ、1764年10月15日

大尉殿、あなたの3日付けの手紙がやっと昨日ついたのはどうしてなのか判りません。返事の受け取りがこのように遅れましたので、この郵便に間に合わせるために、大急ぎで返事を書かなければなりません。そ

うしないと、私の手紙はあなたがエクスにいる間にそこに届かないでしょう。

私がコルシカへ行けるような状況が来ることを期待するのはほとんど無理のようです。かりにこの旅行が可能になるとしても、それは季節が良くなってからのことでしょう。それまでの時間は貴重です。可能な限り無駄にしないようにしなければなりません、あなたからの資料を受け取らないかぎり、時間は無駄になってしまいます。私にまず必要な資料の簡単なメモを同封します。そして、この計画ではあなたご自身からのご教示が常に必要です。その点で、あなたは自分の能力の欠如を口にしてはなりません。あなたのお手紙から判断する限り、私は自分の目よりあなたの目の方を信頼しなければなりません。そして、あなたを通してあなたの国民を判断する限り、あなたの国の人以外の人を案内人にするには間違いです。

これはあまりに大きな計画なので、私は自分の無謀さに震えています。ですから、少なくともその上に軽率の上塗りをするようなことはしてなりません。私の精神はゆっくりとしか働きません。それに、老齢と病がさらにその働きを鈍らせます。暫定政体というものにはそれなりの不都合が付きます。必要な変更だけを行うために、どんなに注意を払っても、われわれが追求しているような制度は少しもショックを与えずに生まれるということはありません。まず土台を築き、次にゆっくりと建物を建てることができるでしょう。それには設計図ができていなければなりません、まさにこの設計図を引くのにより多くの思案が必要なのです。その上、不完全な制度はその利点よりも不便だけを感じさせ、人民はその制度を最後まで仕上げることに嫌気が差すということを心配しなければなりません。しかしながら、一応どんなことができそうなかを考えてみましょう。私が必要とする資料を受け取ったと仮定します。それを調べて頭に入れるのに6ヶ月、そして自分の得た知識を消化するのに、少なくともさらに6ヶ月かかります。ですから、来年の春から1年間かけて、私は暫定政体の形態についての私の素案を提出できるでしょう。そして、私の完成案を示すにはさらに3年が必要です。私は自分に可能なことしか約束すべきではありません。私はこれほど短時間で自分の仕事を完成できるか確信がありません。ただし、1年後、そして3年後という期限をちじめなければならぬなら、そのような短縮はできませんので、この企画には最初から着手しないほうが良いということは確実です。

現状の下であなたがコルシカへ帰ろうとされていることを、私はうれしく感じます。そこであなたは間違いなくわれわれの目的に専念されると思いますが、それは私たちにとって大変有益です。私があなたに何を尋ねるべきかが私にわかる以上に、あなたは私に何を言うべきかがよく判るでしょう。けれど、敬意と賞賛の念が私に掻きたてる好奇心から、こんなことをお尋ねすることをお許してください。パオリ氏は何歳ですか。彼は結婚していますか。子供がありますか。軍事技術をどこで身につけたのですか。現在の政府と民事行政で彼はどんな役職についていますか。この偉人は、祖国の救済者としての役割を終えた後、普通の市民に戻る決意をするでしょうか。すべての点で包み隠さず話してください。あなたの人民の栄光、平安、幸福はいまや私よりあなたにかかっております。

敬具 J.=J. ルソー

あなたの郵便が私の所に届くにはどんな手段があるかを指示することはできません。そのことで現状では、私が隠れ家から手配することは容易ではありません。ですが、荷物を預けられる住所は以下の通りです。あなたの都合で適当な町を選んでください。当然のことながら、その町が遠ければ遠いほど、それだけ荷物が私の所に着くのに時間がかかります。

パリ：デュシェーヌ氏宛、書店主、

サン＝ジャック通り

リヨン：ボワ・ド・ラトゥール夫妻宛

ジュネーヴ：ディヴェルヌワ氏宛、商人

ポントルリエ：ジュネ氏宛、郵便局支配人

「必要な資料メモ」

コルシカの正確な地図。行政区画が地域ごとに線引きされ、地域名の記されたもの。地域ごとに色分けされていていればさらに良い。

コルシカ島の正確な記述。博物誌、産物、文化、県、郡。都市、町、教区の数、大きさ、状態。できる限り正確な人口統計。要塞と港湾の状況。産業、技術、海運。現在行われている、また今後行いうる商取引、等等。

聖職者の数と民衆の信頼度。彼らのモットーはどんなもので、祖国との関係での彼らの振る舞いはどんなものか。歴史の古い名家、特権団体、貴族階級の状態。都市は自治権を持っているか。

民衆の習俗、彼らの嗜好、仕事、楽しみはどんなか。軍事の体制と編成、規律、戦術はどうか、等等。

コルシカ国民の現在までの歴史、法律、身分制度。

政治の現状に関する一切のこと。現状で困っている点、司法の遂行状況、公共の収入、経済体制、課税と徴税の方法、毎年人民が支払えるおおよその税額。

私が必要とする情報は全体として以上です。ただし、以上の項目のうち、いくつかは非常に詳細に、その他は大雑把でかまいません。一般的に言って、国民の気風を一番良く知らせる事柄はあまり詳しく説明する必要はありません。一つの特徴、一つの言葉、一つの振る舞いが一冊の本より雄弁な場合がしばしばです。ただし、説明が不十分であるよりは説明しすぎのほうがましです。

③ L. 3634：ビュッタフォコ大尉からルソーへ

1764年11月10日

絶えず走り回っていて、あなたの10月15日付の手紙へのご返事が遅くなってしまいました。一時的に休みが取れましたので、この機会に受け取りました手紙へご返事をいたします。

私は、来春、私たちの島であなたにお会いできるという希望を失いたくありません。コルシカ人に対するあなたの友情があなたの力となるでしょう。それまでの間に、私が南フランスで収集できた資料が届くでしょう。荷物はエクス・アン・プロヴァンスから、二日にボワ・ド・ラ・トゥール夫妻宛に発送しました。別の包みも Regt (?) から受け取られるでしょう。コルシカからのものは、私ができるだけ早急に送るようにします。

臨時の形がいったん整えば、完全な立法集は遅れてもかまわないでしょう。時期はあなたの都合で決めてください。私たちはあなたができるだけ短期日で仕上げられるものと信じています。

まもなく私はコルシカへ渡ります。そこで間違いなく私たちの計画に取り掛かります。それが私の最大の関心事です。ただ、私はあなたが私の乏しい知識に過大な信頼を寄せておられるのを心苦しく感じています。あなたの考案された優れた構想を実行できるということは私を喜ばせます。私とその仕事にどれほどふさわしくないものであるかを感じれば感じるほど、益々私はそれを達成できることを望みます。繰り返すのですが、私にはただ熱意があるだけです。それがきっと私に不足しているものを補ってくれるでしょう。そこで、私に新しいと同時に、デリケートかつ困難なこの問題をどのように扱うかについていくつか細かい事柄に言及させていただきます。

まず、パオリ氏について正直にお話ししましょう。彼

は37歳で、未婚です。一度も結婚したことはなく、また結婚を望んではいないようです。マイユボワ元帥の下で、コルシカに平和が訪れたとき、コルシカ国民を率いる将軍たちの一人であった彼の父は、大佐の肩書きでナポリに渡りました。彼は非常に若かった彼の息子を同行し、軍事アカデミーに入学させました。1754年に、フランス軍がコルシカから退却した後、コルシカ人を率いる将軍ガフォリはジェノヴァ共和国の密使によって暗殺されました。ナポリ王に使えていたパオリ氏は、コルシカに戻り、志願兵として戦い、次いで将軍職に選ばれました。国民の幸せに対する彼の熱意、彼の愛着心、彼の優れた才能は彼が将軍となるのにふさわしいものでした。人々が彼に抱いた期待を彼は一度も裏切りませんでした。彼は冷酷なくびきから祖国を解放するという名誉しか望んでいません。彼は祖国に自由が支配するのを見たいという野心しか持っていません。

国民の幸せがそれを望むのであれば、彼は祖国の救済役を務めた後、喜んで一市民に戻るでしょう。私は彼をととても尊敬していますので、そうとしか考えられません。国民の幸せを愛するあまり、彼が市民に戻らないとしても、パオリという名前の栄光と名声が後世において彼をそこへ導くでありましょう。祖国の破壊者となった後に、スラの退位が同国人と全世界の尊敬と賞賛を彼に呼び寄せたとすれば、国民を縛る鎖を断ち切った後に、コルシカ人の将軍が同様の行為をすれば、人々はなおいっそう彼を賞賛するに違いありません。

彼が将軍の地位に着いたとき、彼の権威は法外なものでした。彼が討論の議題を設定しました。彼の意見は大変尊重され、ほとんど彼の意見で事が決まりました。彼は裁判で判事を務め、彼の判断で結審となりました。彼は全部隊を指揮しました。全員が兵隊でしたから、彼は全国民を指揮したのです。彼は権利上絶対者ではありませんでしたが、事実では絶対者でした。けれども、彼がその権利を乱用したことはありません。彼は混乱を収めました。民事のための下級行政府が設置されました。将軍が議長を務める最高会議が選出されました。全教区集会が開かれなときは、この会議体が主権者を代表しました。

パオリ氏の生活態度は、単純で質素です。いつも同じ服装で清廉、誠実と公正の精神にあふれています。無欲で、彼が差配する国民の収入も節約を旨としますが、その粗末な収入によっても彼は大変多くのことを成し遂げました。彼はすらっとした体躯で、金髪、碧

眼。瞳は生き生きとして、情熱にあふれています。その風采は偉大な精神性をかもし出しています。もしあなたが彼にお会いになれば、あなたが彼を愛し尊敬されることは間違いないと思います。以上は私が彼になしうる最大の讃辞です。

明日私はパリに発ち、その後すぐコルシカへ向かいます。もしお便りがいただけるようでしたら、フランス国王軍元帥、フランス・コルシカ駐屯軍司令官であるマルブーフ伯爵宛にしてください。私は島内に住みますから、彼が私に届くように手配してくれるでしょう。あらかじめそのように連絡しておきます。

心からの愛着をもって。敬具 ビュッタフォコ
フォンテーヌブロー、1764年11月10日

注

- 1) ジョヴァンニ・ピエトロ・ガッフォーリ (1710-53)

コルシカ人の先頭に立って蜂起。彼が擁立に尽力したテオドル王が消息を絶った後、愛国者の頭目となった。ジェノヴァ人が送り込んだロンチという男に暗殺された。

- 2) マルブーフ伯爵、ルイ＝シャルル＝ルネ (1712-86)

コルシカ島がフランスに併合された後、彼はボナパルト家の子供たちの教育に便宜を図った。フランス皇帝となったナポレオンは、彼への恩義を忘れることはなかった。

- ④ L. 4068: ビュッタフォコ大尉からルソーへ

1765年2月26日

あなたから便りがありませんので、私は大変心配しております。私の手紙にあなたが誠実にお答えいただいたこと、あなたがわれわれの置かれている状況に関心を持っておられること、それらのことに加え、社会の福利に対するあなたの愛情を考えると、当然ご返事がいただけるものと期待していました。どうして返事がないのか私には理由が想像できません。反省してみても、私に何か落ち度があったとは思えません。どうかこの不安な状態から私を引き出してください。

今私たちが関与している仕事について、もしあなたが考えを変えられたのなら、私は非常に残念に思います。あなたに仕事の話を持ちかけたことで、もし私が自分をとがめねばならなかったら、私の心は癒されることがないでしょう。私は、自分の手紙とあなたの返事を確実な友人にしか見せていません。ですから、あ

なたとコルシカに関して世間に広まった噂は、私から出たものでも、また、友人たちの口から出たものでもないことは確かです。手紙の内容はパオリ氏に伝えました。彼はあなたへの尊敬と感謝の念でいっぱいです。フランス軍部隊が到着して以来、彼は絶えず視察をしていました。彼は山の向こう [コルシカ北部] からちようど戻ってきました。ジェノヴァ共和国の密使たちが妨害を仕掛けたのですが、彼が出かけたので北部には秩序が回復しました。密使たちはフランス軍が来たので、ことがやりやすくなったとうぬぼれていました。ところが、フランス軍の司令官は、国王の意図はコルシカ国民のなかに騒動を巻き起こすことではなく、反対に国民の秩序と全体的団結を維持することであると声明しましたので、反乱者たちは空想的な計画を棄て、あきらめました。

ルソー殿、私は11月10日付けのフォンテーヌブローからの手紙で、あなたのご返事はバスティアのマルブーフ伯爵宛にさせていただきようお願ひしました。当時、あなたの手紙を私に届けられる人がまったくありませんでしたが、今は直接私宛に書いてくださってかまいません。私は、ボワ・ド・ラトゥール夫人宛に荷物を一つ送りましたが、もうあなたの元に届いているはずです。ペルピニャンから発送したもう一つの荷物も同様です。当方での日常が回復すれば、われわれはあなたの覚書の目標が実現するように努力いたします。あなたがわれわれコルシカ人に表明された善意をあなたが持ち続けになるならば、パオリ氏と国民は大変喜ぶことでしょう。

ルソー殿、あなたからのご返事によって私の困惑を解消していただければ、と願っております。あなたからの便りを受け取ることにあきらめなければならないとすれば、それは私自身にとっても、さらにはわが国民にとってなおいっそうつらいものとなります。私はこの役目によって、わが国民があなたに恩義を負うものとなれることを念じているからであります。しかしながら何が起ころうとも、私が誇りに思っております、あなたに対する尊敬と真摯な愛着の気持ちが変わることはありません。

敬具 ビュッタフォコ

1765年2月26日 バスティア

- ⑤ L. 4192: ルソーからビュッタフォコ大尉

モティエ＝トラヴェール、1765年3月24日

ビュッタフォコ殿、私が新たな不幸の深淵に呑み込まれていることをあなたがご存じないことがわかりま

す。あなたの前々回の手紙を受け取って以来、一瞬も息つく暇がありませんでした。あなたから頂いた最初の包みも、目を通す暇さえありませんでした。ペルピニヤンからのものについては、何の消息も届いておりません。私は何度もあなたに手紙を書こうと思いましたが、騒ぎが絶えず、心身のあらゆる苦しみ、私自身の用務に押しつぶされ、あなたのことまで考えるゆとりがありませんでした。休息の一瞬が訪れるのを待っていましたが、待っても待ったも来ず、決してこないかもしれません。こうして今返事を書いている瞬間も、この手紙を最後までこの場で書き終えることができないのではないかと心配になるのです。

大尉殿、あなたが私の企てた仕事に期待をよせられても無駄になりました。これほど名誉な務めに携わるとは、私にはあまりにも甘すぎる考えでした。この慰めはもう奪われてしまいました。私の魂は悩みで疲れ果て、もう考えることができず。私の心も同様です。もう頭が回らません。私の前に見えるものは沼だけです。私の知性はすでに死んでいます。いくらかでも注意力を注いで一つの目標を追求することがもうできません。その上、私が住んでいる土地の主権者であるプロシヤ王の保護、その土地の総督である元帥卿の保護にもかかわらず——不運なことに二人とも私からあまりに遠方にいるのです——、浴びるように辱めを受け、もはやこの隠れ家では暮らせないので、別の隠れ家をあてもなく探しにさまよい出なければならない不幸な逃亡者に、あなたは何をしろといわれるのでしょう。

そうではありますが、大尉殿、私にふさわしい隠れ家を一箇所知っています。そして私自身もそこにふさわしいと信じています。それはあなた方、勇敢なコルシカ人のもとへ行くことです。自由を勝ち得たあなた方、正義を貫くあなた方、そして過去に不幸をなめ不幸な人に同情せずにはいられないあなた方のところです。これが私にできそうなことなのです。このことをパオリ氏に話してください。人気のないどこかの地方で小さな家を借り、そこで余生を静かに終えることはできないのでしょうか。私には20年前から一人の家政婦がついており、彼女が病の絶えることのない私の世話をしてくれています。彼女は45歳で、カトリック教徒、正直で賢く、必要とあれば、地の果てまでも私に付き添い、不幸を分かち合い、最後に私の目を閉じてくれる決心をしてくれています。私は彼女と共に小さな家庭を作ります。私は自分を迎え入れてくれる近所の人々の気持ちを傷つけ不愉快な思いをさせないよ

うに努めます。

さらに、何もかも申し上げなければなりません。私を迎え入れてくださる場合、代償なしでなければなりません。生計に関しては、どなたのお世話にもなりません。私への保護権に関しては、代償なしで認めてください。なぜなら、私があるあなたの方のもとへ行きましても、あなたが現在関わっている計画に関して私にかなる期待も寄せないでください。繰り返しますが、私は今後そのことを考えるつもりはありません。考えなければならなくなったら、そのときには、私はあなたの方のところで暮らすことをあきらめます。なぜなら、今までもそうでしたが、これからも私は、自分がその元で暮らす政府に深い敬意を持って対することを不可侵の信条としてきました。私は政府を批判し、何か罰を加えたり、あるいはなんらかの問題で改革を望むようなことに一切首を突っ込みません。その上、今の私にはとても無視できない強固な理由があります。私はあなたが送ってくださった覚書に少し目を通しましたが、私の考えはあなたの国民の考えとはなはだしく異なることに気づきました。私が提案するプランに不満を抱く人がたくさんいるだろうということ、そして恐らくあなた自身が第一にそうなるかもしれません。ところがいまや、私は口論、論争にはうんざりしています。ですから私は、どんなことをしても、自分の周りに私に不満を抱く人を作ったり、見たりしないようにしたいのです。私は静かな生活を熱望しています。私の最後の願いは周りのすべての人から愛され、穏やかに死ぬことです。その点で、私の決意は揺らぎません。その上、私は打ち続く病苦にさいなまされ、益々怠惰になっています。私自身の雑事を消化するのにさえ時間が足りません。私の精神は消耗しきっており、他のことに気持ちを向けることは不可能です。もし静かで穏やかな生活が得られ、私の余生が延び、暇ができ、そしてもしあなたが、私にはあなたがたの国民の歴史を書くことが可能だと判断されたならば、そのとき私はこの名誉ある仕事を喜んでするでしょう。この仕事は私の頭脳を過度に疲れさせることはなく、私の心を満たしてくれるでしょう。私があるあなたの方の国に滞在したことの記念碑を後世に残すことは私の大いなる喜びとなるでしょう。しかし、それ以上のことは何も求めないでください。私はあなたを騙したくはありませんので、空しい期待を代償にしてあなた方からの保護を手に入れるようなことは、自分に赦せません。

私はこんな具合に考えていますが、その際私は私の体力よりも私の心に耳を傾けました。なぜなら、今の

有様では、私の家政婦さんといくらかの荷物を抱えたわずらわしい長旅に、私が耐えられるかどうかわかりません。けれども、少しでもあなたからの励ましがあれば、私はかならずや挑戦するつもりです。たとえ旅の途上で力尽きることになろうとも。しかし、最低限、私は休息の余生を過ごせるという精神的な保障が必要です。というのも、私は万事休しており、もう逃げ回れません。私の危うい危険な状態にも関わらず、当地であなたの返事をお待ちしています。それまでは方針を決めません。できるだけ早くご返事ください。私のほうがどんなに我慢しても、私の思い通りに事態が進展はしないからです。

敬具。

後記 聖職者について言い忘れました。もし彼らが私に不満を持っているならば、彼らは厄介でしょう。しかし、私はどんなことでももう論争をしません。宗教に関しては一切口を閉ざします。私は当地の聖職者が大嫌いですが、その分だけあなたのところの聖職者に好意を抱きます。私はフランスの聖職者たちの間にたくさん友人がいます。彼らとはいつも良い関係でした。ミサに行くこともいといません。ただし、何があるかと、私は宗教を変えることは絶対に望みません。その件については、聞く耳を持ちませんので、とやかに言われたくはありません。手紙の宛先は次のようにしてください。《ポンタルリエ経由、モティエ＝トラヴェール宛》。

受け入れのご返事がいただける場合には、時間の無駄を省くために、リヴォルノのどなたかの名前をお知らせください。通過に必要な手続きをその方に尋ねられます。

⑥ L. 4192：ビュッタフォコ大尉からルソーへ

1765年4月11日

ルソー殿、パオリ氏の返事をお届けします。しばらく前に、コルシカへあなたをお招きしたいという同氏の手紙をお送りしています。それらの手紙(注1)から、パオリ氏がどれほどあなたに当地でお会いしたいと願っているかがお分かりでしょう。私はといえば、かつてこれほど熱望した事柄は何もありません。

私は衷心からあなたのすべての不幸に共感するものであります。もしあなたの苦痛を少しでも和らげるためにお役に立てるのであれば、われわれはとても幸せに思います。私たちの島で、あなたが熱望しておられる平和で静かな生活をきつと見つけられるでしょう。島で幸せに長く暮らし、私たちの仕事の結末を見届け、

あなたの忠言と著作がこの国民に名声を与えるのをご覧になれるでしょう。あなたはコルシカ人に、感じやすい心、あなたの苦しみを見て苦しみを共にする同情心に満ちた魂を発見されるでしょう。私の祖国がその胎内に人類の擁護者、芸術と学問の友、つまり美德の友を抱くならば、私はわが祖国を幸せと感じるでしょう。あなたのご希望に沿って祖国があなたに提供する避難所は、わが祖国が自由のために戦った不断の勇氣と共に、わが祖国の後世の人々の名誉となるでしょう。わが祖国は、あなたの迫害者たちに対して、われわれの風習はなお野蛮であるとしても、われわれはもうそうではないことを知らしめるでしょう。あなたが一番良いと思われる仕事を提供してください。何もしたくないのであれば、それでかまいません。歓心を買うために何もなさなくても、私は少しも苦しみにさせません。この国では外国人は誰でも歓迎されます。その外国人がどんな宗教を信じているかを尋ねたりしません。幸いにも司祭たちはその点で無知です。修道僧にいたってはなおさらです。また、彼らは公共の業務に何の影響も持っていません。彼らは告解室の外では何の信頼もないのです。ですから、この面でも、まったく安心していただけます。

ルソー殿、旅程ですが、リヴォルノへ行ってください。トスカーナ公国におけるサルディニア国王の総領事であるリヴァローラ伯爵(注2)の下へおいでください。彼はコルシカ人で、私の友人の一人です。誠実、賢明で、慎み深く、立派な愛国者です。この人物にご満足いただけるだろうと思います。彼なら、あなたの家政婦さんと荷物と共にあなたがコルシカへ渡られるためのあらゆる便宜を図ってくれるでしょう。そして、お願いですが、どうか私が住んでおります村に近いフォッチェ・デ・ゴロ(注3)で下船してください。そこでの宿は粗末ですが、心のこもった宿です。あなたのお気に召す宿が見つかるまで、しばらくご辛抱願います。ただし、お伝えしておかなければなりません。もし今の家庭生活を維持したいとお考えなら、渡航に際し、寝具、料理道具、あらゆる種類の衣類をお持ちいただく必要があります。これらのものを当地で手に入れることはできません。

ルソー殿、どうかあなたのご出発の予定をできるだけ早くお知らせください。あなたがいつリヴォルノに来られ、いつコルシカに渡られるか、正確に知ることができれば助かります。私はそのときを待ち焦がれています。あなたを心から抱擁します。

敬具 ビュッタフォコ

ヴェスコヴァド，1765年4月11日

[注1] パオリからルソー宛の手紙は発見されていない。

[注2] アントニオ・リヴァローラ（1795年，ピエモンテで死去）

コルシカの愛国者ドメニコ・リヴァローラの息子。ドメニコは、ジェノヴァ、ヴェネチア、ローマの軍隊で働いた後、サルディニアのコルシカ人部隊で大佐となった。コルシカの独立闘争に参加。英国軍の一隊とともに、1745年島に上陸。私財がジェノヴァ人に没収されているのを発見。父同様、軍人のアントニオはバステリア攻囲戦で負傷。彼は、リヴォルノ駐在サルディニア領事であったが、フィレンツェ駐在のサルディニア使節が不在の場合にはその任務をも遂行した。彼はパスカル・パオリの熱烈な賛美者であり、最も献身的な部下の一人であった。

[注3] バステリアから20キロメートルほどの所にあるゴロ川の河口。ヴェスコヴァトはゴロ川からおおよそ5キロメートルの海岸にある。

⑦ L. 4305：ルソーからパスカル・パオリ將軍へ

1765年4月18日

[パオリ殿、] 名誉にもあなたから戴きました手紙にご返事しなければなりません、それには細部まで良く考えて書かなければなりません。ところが、私の現状ではそのようなご返事を書くことはできません。ゆとりが見つければ真っ先にこの義務を果たすつもりです。私の文通相手 [ビュッタフォコ] を通して私の手紙をお届けします。その前に、彼は先月私が書きました手紙をお伝えしているものと思います。なお、私たちの文通は確実に決まった経路でしなければなりません。ところが、一通は必要もないのに違った経路で届きました。どうか、私があなたの手紙の目的に強い関心を持っていること、そして、あなたの才能と徳を私が賞賛し尊敬していることを疑がわないでください。

[注] この自筆原稿にはパオリという宛名は記載されていないが、パオリ宛であることは確実である。また、パオリのルソー宛の手紙は一通も発見されていない。

⑧ L. 4442：ルソーからビュッタフォコ大尉へ

1765年5月26日

大尉殿、私が蒙りました雷雨のような危機とそのために自分のとるべき方針がこれまで決められなかったために、あなたへの返答と感謝をお伝えするのが遅くなってしまいました。しかし、これまでの一連の事件

の結果、今では次のように決心しております。国王と総督によって私の保護が公表され、平安とはいえないまでも安全は保たれることが確認されましたので、私は当地に留まることに決めました。それは私があなたの国で暮らしたいという衷心からの願望を失くしたからではありません。そうではなく、私の体力の完全な消耗、さまざまな心配、耐えなければならない疲労、私を取り巻く環境からなおも生まれるさまざまな障害を考えて、私は当分これまでの計画をあきらめざるをえません。これらの困難にもかかわらず、私の心はまだ完全にはあきらめきれておりません。親愛なる大尉殿、私は老い、衰え、体力は失われ、願望だけが勇み立ちますが、実際の望みは消えていきます。ただ、いずれにしましても、パオリ氏が私に避難所を提供しようとしたことに対し、私の衷心からの強い感謝の気持ちをお伝えください。勇敢で寛大な人民よ！ ヨーロッパのどこにも避難所を見つけれなかったときに、心と腕と炬燵を開いて私を迎え入れようとしてくれたあなた方のことを、私は一瞬たりとも忘れることはないでしょう。あなた方の島に私の遺灰を残す幸せをもてないとしても、私はなんらかの感謝の印を残すように務めるでしょう。そして、全地球の人々に向かって、私はあなた方を私のホスト、私の保護者と呼ぶことを自分の名誉とするでしょう。

ランキュレル騎士からパオリ氏の手紙を受け取りました。この手紙に対し、私がどうしてあれほど短く漠然とした返事を書いたか、そのわけは次の通りです。あなたが私になされた提案の件が、どうしてか世間に知れてしまいました。ヴォルテール氏は、この提案は自分が思いついたもので、コルシカ人の名を騙って私に手紙を書いたところ私がまんまと騙されたのだと、誰かれなしに吹聴しているようなのです。私はあなたを信頼していましたので、ヴォルテール氏の吹聴するにまかせ何もせず、あなたにさえもそのことは話ませんでした。ところが、彼はそれだけでは納まらず、前の冬には、元帥卿や国王の保護があろうと、この土地から私を追い出してやるとうぬぼれました。彼には密使がいて、そのうちのあるものの名は判明していますが、他は不明です。そして、私の最近の著作を口実に、私への敵意が最高潮になったとき、ド・ランキュレル氏(注1)が当地に参りました。彼はパオリ氏の使いといって私に面会に来ましたが、パオリ氏の手紙も、あなたの手紙も、誰からの手紙もまったく持っておりませんでした。彼は名乗ることさえ拒みました。彼はジュネーヴから来ており、そこで私の一番熱心な敵た

ちに会ったということ、私はジュネーヴからの手紙で知りました。彼は何の用もないのに当地に長逗留しました。それはまったく不可解きわまるものでした。彼の滞在は私に敵対する嵐が吹き荒れた時期に当たりました。その上、彼は私がコルシカとどんな関係にあるかを知ろうとあらゆる努力を払いました。彼は一度もあなたの名前を言いませんでしたから、私もあなたの名前を言いませんでした。最後に、彼はパオリ氏の例の手紙をもって来ましたが、私はパオリ氏の筆跡を知りません。こんな具合で、私が怪しんだのは当然ではないでしょうか。こんな場合、私はどうすべきでしたでしょうか。何が起ころうと、意味の判然としない手紙 [パオリ氏宛] を彼に手渡すこと。私はそれを実行しました。

今では、私たちの用件や計画のことをお話ししたい気持ちになっているのですが、時宜はそれを赦してくれません。私は気遣いと困惑で押しつぶされ、ここから5、6里離れた所に別の住まいを探さねばならず、他に用事がなくても、非常に不便な引越しの世話だけで私のエネルギーは吸い尽くされてしまいます。それが自分のためにできる最低のことなのです。この先の見通しですが、私の頭脳が持ち直したとして——そんなことはもうありえないと思っているのですが——、今から一年は、自分自身以外のことに専念することは私にできないでしょう。私がお約束できること、そしてあなたが今からでも信頼できること、それは残された私の人生において、私は自分とコルシカのことにしか関わらないでしょう。それ以外のことはすべて私の精神から完全に消えています。それでもやはり、歴史であれ、制度であれ——それらは同じことですが——、資料を集めることを怠らないでください。あなた方の政府の状況から見て、しばらくは待つ余裕があると私は思います。あなたが送ってくださった書類の中に、1764年にヴェスコヴァドで出された覚書が含まれています。あなたの手になるものだろうと推測するのですが、優れたものだと思います。その他のことはすべて、徳高きパオリの精神と頭脳がやり遂げるでしょう。それでも、しっかりした暫定統治案が必要なのでしょう。外国の勢力が介入し続ける限り、それ以外のものを作ることはできないかもしれません。

大尉殿、一度お会いできないものかと思っています。2、3日、話し合えば、たくさんのが解明できるでしょう。本年中は落ち着いた時間は取れませんので、あなたに何も提案できません。けれども、来年はあなたが当地に来る手はずを取ることはできるでしょうか。

私たちの出会いは喜ばしく分かれば満足なものになるだろうと、私は思っています。さあどうぞ、私たち二人の間にできた交友の権利をお使いください。

あなたを抱擁します。 ルソー

(注1) Paul-Elzéar Rancurel は、1738年、エクスマン＝プロヴァンス生まれ。実際は騎士ではなく、カトリック教会の副司祭で、詐欺師まがいの人物であった。『書簡全集』, t. XXIV, Appendice 355, Note a, pp. 355-6)

⑨ L. 4728：ビュッタフォコ大尉からルソーへ

1765年10月16日

ルソー殿、パオリ氏宛の手紙が同封されたあなたの最後の手紙を受け取ってから、ずいぶん時間がたちました。私たち二人はともに、プロシャ王があなたの保護を確認したということを知って大変喜びました。立派な哲学者であるこの偉大な王は、立派なことしかできないのです。彼が自らの国においてあなたに安全を保障するという行為は、取るに足らないことではありません。国王ご自身の名誉ともなるでしょう。

あなたへのご返事が遅くなってしまいました。というのも、私はフランスへ行き、さらにあなたに会いに行くつもりだったからです。それが延期になりましたので、大急ぎで便りを書いています。ヴェスコヴァド発となっている短い原稿に関して、あなたは私をうれしい気持ちにさせてくださいます。けれど、そのアイデアは私のものでは在りません。それは、あなたや、マキャヴェリや、モンテスキュー議長のものです。私はあなた方の考えをただつなぎ合わせただけです。私がお自分の国のために行った研究の成果であるこの仕事がいかに適用可能であれば、私にとってすぎた喜びです。その上、私がおこの仕事をしたのは虚栄心からではありません。私は祖国を愛しています。祖国の役に立ちたいと思っています。そして、すべての同胞が同じ願いを持つようにしたいのです。この著述が政体 (Constitution) を決めるのに役立たないとしても、少なくともそれは祖国の繁栄を願う私の熱意の証、すべての善良な市民が祖国に納めるべき貢物です。その覚書は書かれた同じ年に評議会 (Consulte) で読み上げられました。人々は大体満足だったようです。既存の制度のいくつかはそこから採用されました。しかし、全体を受け入れ、実行に移すには、まだ長時間の仕事が必要でしょう。ルソー殿、何ができるかはご覧の通りです。私はそれをあなたの手にお任せしますから、それを活用し、訂正、加筆、削除してください。

コルシカ革命に関してもう一つ小さな作品があるのですが、機会を見てあなたにお送りします。私はたいした読書家ではありません。けれど、少ない読書ではありますが、本を読んでこの国に関わる内容に出会えば、抜粋を作ります。この作品は、J.=J. ルソー、モンテスキュー、ゴードン、アルジャーノン・シドニー、そしてわれわれ自身の正当化のためのさまざまな著作から作り上げたものです。私はありもしない文才をひけらかすつもりはありません。事実とまったく違うように見せかけようとするより、ありのままを率直に語る方が名誉になると私は信じています。気取らず、ありのままを語る誠実な人間であれば十分です。要するに、カエサルのはカエサルに返し、自分たちのものだけを楽しめばよいのです。

ルソー殿、直接郵便で届く手紙は今後受け取りも返事も拒否するという声明をあなたがベルン新聞にだされたのを見ましたので、この手紙はリヨンのボワ・ドゥ・ラ・トゥール夫妻宛に送ります。できましたらお便りをください。あなたへの友情とあなたの友であるという誇りは絶対に揺らぎません。

敬具 ビュッタフォコ
1765年10月12日

注

- 1) この数字は、リー編『ルソー書簡全集』のレター・ナンバーである。以下同様。*Correspondance Complète de Jean-Jacques Rousseau*, édition critique, établie et annotée par R. A. Leigh, tome I-LII, Institut et musée Voltaire, Genève, 1965-98.
- 2) Paul Silvani, *En Corse au temps de Paoli*, Albiana, 2007, p. 93. 本節の記述の基本線は、シルヴァニの同書を参考にしている。
- 3) 「① L. 3542」は、筆者が翻訳して、本稿に付す書簡資料の番号である。したがって、引用文は本稿の当該書簡に含まれる。以下同様。
- 4) ④ L. 4068.
- 5) Paul Silvani, *op. cit.*, pp. 97-8.
- 6) Sven Stelling-Michaud, *Introduction au Projet de Constitution pour la Corse, Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau*, t. III, édition de la Pléiade, 1964, p. CCVI.
- 7) ⑤ L. 4192.
- 8) Sven Stelling-Michaud, *op. cit.*, p. CCVII.
- 9) Paul Silvani, *op. cit.*, p. 24.
- 10) Ernestine Dedeck-Héry, *J.-J. Rousseau et le Projet de constitution pour la Corse*, Philadelphie, 1932. 筆者は本書を読んでいない。
- 11) ⑧ L. 4442.
- 12) Cf., Jean-Luc Guichet, *La Corse dans la correspondance de Rousseau*, in *Etudes Corses*, Juin 2008, No 66, pp. 59-69.